

稲陵会報

第56号

発行 横田高等学校
令和4年
3月1日

コロナ禍の中での 活動状況



稲陵会 会長
石原 肇
(第42期)

稲陵会員の皆様には日頃、稲陵会と母校のためにいろいろご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、令和3年度はコロナ禍のため、昨年に引き続いて定例の評議員会も12地区代表者会となりました。事業・会計の他は、役員選出で副会長の交代があり、11期務められました横路仁朗氏(46期・亀嵩)と6期務められました植田美由紀氏(54期・横田)が退任されて、新しく、細木敏幸氏(58期・馬木)と末森利江子氏(59期・阿井)が就かれました。

町外の支部総会や県・町の教職員の間は、いずれも中止となり、町内支部総会も三成支部と布勢支部のみの開催となりました。

また、これまで様々な形で稲陵会の発展に寄与され、東京と関西の奥出雲でも格別のご尽力をされた東京支部の加藤延之氏(32期・横田出身)と関西稲陵会の源大佑氏(33期・亀嵩出身)のお二人がお亡くなりになりました。衷

心よりお悔やみ申し上げます。

ホットなニュースとして、ホッケー競技に6名の稲陵会員が、日本を代表してオリンピックに出場されたことや、全国総体で横田高校男子が久々の優勝に輝いたことは、うれしい限りでした。

また、横田高校の入学生の増加と、地域との交流を期待して、奥出雲町のご支援により、紫雲寮に隣接して学習拠点施設が完成しました。備品の一部が、稲陵会も拠出した百周年記念事業の剰余金で購入されておりますので、6月の評議員会の折、施設を視察しました。2年連続コロナ禍の中で、様々な制約を受けて、今年も忍耐の年となりました。

今後皆様方の変わらぬご支援・ご協力によりまして、母校の横田高校が益々発展しますとともに、皆様方のご多幸を心より祈念します。

ごあいさつ



校長
深田 新

こんにちは、今年度4月に着任しました深田新でございます。稲陵会の皆様におかれましては、日

頃より本校の教育活動に対しご指導・ご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。コロナ禍により各支部活動の自粛が続いておりますが、皆様と早く対面し交流できることを願っているところです。

年の瀬を迎えた12月末、廊下を歩いてみますと寒稽古中の剣道部生徒の大きな声が耳に入ってきました。外は雪が積もっておりとても寒い日でしたが、剣道場は生徒たちの熱気で盛り上がりつつありました。道場内をよく見渡すと、剣道部監督と同期という縁で稲陵会先輩お二人が来校されており、生徒たちに稽古をつけていただいている所でした。先輩と生徒との激しい稽古、実力者の先輩に対し生徒も果敢に向かっています。生徒は先輩の圧力で一瞬転びそうになりますが、そこをぐっと踏ん張って向き直り、また先輩に向かっていきます。「生徒たちの大きな声の源はここにあったのか」と、私は稲陵会先輩の存在の大きさを改めて感じながら、教育目標である『「耕心培学」の精神が確実に受け継がれていくのだと思いました。

9月はじめには、令和3年度「稲陵祭」記念講演を、稲陵会の先輩である京都大学准教授の藤原辰史先生にお願いすることができました。生徒会執行部の生徒連が入念な事前打ち合わせを行い、オンラインでの本番を行いました。「食」を切り口に奥出雲町の魅力を皆で語り合いました。また夏と言えば、男子ホッケー部の全国制覇がありました。全国総体で10年ぶり6回目の優勝を果たし、校内だけでなく町内外の方々に大きな

感動と勇気を与えてくれました。選手たちの頑張りが一番ですが、先輩方のご協力とご支援の賜物でもあると思っています。2学期、生徒一人ひとりの頑張りの連鎖の中、今年度入会する3年生の進路実現に向けた挑戦も続いております。

話は変わりますが、次年度から改訂される新学習指導要領に「社会に開かれた教育課程」という理念があり、前文には「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」と書かれています。この点で本校は、「奥出雲学」と命名された地域の教育資源を活かした地域課題発見・解決型の体験活動や地域ボランティア活動に取り組んで参りました。これまでの実績をベースにして、今後いかにして「奥出雲学」を継続・発展させていくのか、その持続可能な指導体制のあり方を検討していく必要があると思います。

そこで、本校がめざしております「四方よしの人づくり」という教育目標について、令和4年度より「めざす生徒像・人間像(グラデュエーション・ポリシー)」として正式に公表する予定でございます(「資料1」を参照願います)。また、本校と地域との結びつきを強めるための地域協働組織体として「奥出雲町コン

ソーシウム(仮称) ver2.0の構築に向け、奥出雲町との協議を行っております(「資料2」を参照願います)。稲陵会の代表の方に委員として入って頂き、奥出雲町コンソーシアムによって稲陵会ネットワークを補強していつかはどうかと考えておりますので、今後引き続きご指導ご支援の程を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

<育てる生徒像>
(グラデュエーション・ポリシー)

**「四方よし」の心を持ち
未来を描ける人材**

【わたしよし】自分に自信を持ち、可能性や未来を信じていることができるひと

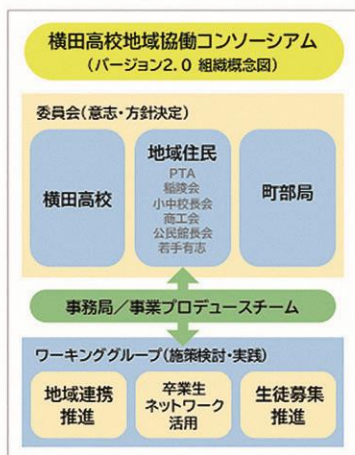
【仲間よし】思いやりを持ち、互いを高め合うことができるひと

【社会よし】郷土、日本、世界を知り、異なる文化を受け入れることができるひと

【未来よし】社会課題を自分事とし、解決に向けて挑戦することができるひと

※横田高等学校グランドデザインより抜粋

【資料1】



【資料2】

高校の「今」をお伝えします

<学校ホームページ>
<http://www.yokota.ed.jp/>

<高校魅力化プロジェクトページ>
<https://www.facebook.com/yokota.dandan>

支部だより

三成支部代議員総会

支部長

安部 隆史

(第63期)

令和3年7月14日(水)、カルチャープラザ仁多農事研修室において三成支部代議員総会を開催しました。来賓には、石原会長、安部副会長、細木副会長、末森副会長、高校から深田校長先生、植田先生のご出席をいただきました。

はじめに、支部長として、奥出雲町の人口減少、少子高齢化が進む中、児童生徒の減少が学校存続の重要な課題となっており、住民一体となって応援・協力していくことが重要であると挨拶をいたしました。

次に、石原会長から、6月28日の評議員会において、稲陵会の役員体制が新しくなったこと、今年で稲陵会結成70周年を迎えるこ

と、また、県外の支部では活発な活動がある中、コロナ禍で開催が難しい状況もあることなどのお話がありました。続いて、副会長である安部隆様、細木敏幸様、末森利江子様からそれぞれご挨拶がありました。



また、4月に着任された深田校長先生よりご挨拶にあわせ、学校の教育活動と人材育成の取組について、教職員以外にも高校魅力化

コーディネーター、アドバイザーなどの協力も得ながら町を支える人材の育成、高校の魅力化をすすめ、生徒数の確保を図りたいとお話がありました。

そして、総会に提案した支部の事業報告と決算報告、新年度事業計画・予算案について承認をいただき、総会の内容を「三成支部だより」で会員に周知することとし終了しました。



新型コロナウイルスが早く収束し、稲陵会会員相互の親睦のもと、母校や地域への思いをもつ会員同士での交流や情報交換ができると良いと強く感じました。

また、近年、会員数が減少する中であって、母校・奥出雲町への愛着、郷愁を醸成し会員相互の親睦、絆を深める各支部の活動に対し改めて敬意と感謝のことばをいただきました。

総会においては、提出した活動経過報告、収支決算(会計監査報告)、会費の賦課徴収、次年度事業計画及び予算案、役員改選(補充)の5議案について、慎重審議のうえ全て原案どおり承認されました。

稲陵会布勢支部は、令和3年度布勢支部総会を令和3年11月24日(水)午後7時より布勢コミュニティセンターにて開催しました。

任期満了による役員改選により選出された新役員は次のとおりです。

布勢支部総会

会計

石原 重夫

(第67期)

支部長 渡部 雅男(留任)
副支部長 石原 重則(留任)
副支部長 吉川由希子(留任)
監事 恩田 嘉明(留任)
監事 多根 和夫(留任)
事務局 山根 富則(新任)
会計 石原 重夫(留任)
評議員 恩田 昌実(新任)
会員の皆様のご健勝並びに稲陵会と母校の益々の発展を祈念申し上げます。

源大佑さんを偲ぶ

関西稲陵会前支部長
名誉会長

西 本 功

(第37期)

関西稲陵会元支部長であり名誉会長である源大佑さんのご逝去の報に接し、驚きと同時にご生前のお姿を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

大阪では、コロナ禍の緊急事態宣言の発出がなされている最中、令和3年6月12日、訃報に接しました。コロナ禍で最後のお別れも、告別式への参列も出来ず、本当に残念でなりません。

一年近くコロナ禍の中、お逢いする事も出来ませんでしたので、体調がすぐれなかったのかどうなのかも存じ上げず、コロナが収束したら又、お会いできるのを楽しみにしておりました。それが突然の訃報に言葉を失いました。あの元気一杯の源大佑さんが、突然に……。

思い起こせば、私と源大佑さんの出会いは、稲陵会大阪支部の創立30周年の総

会が開催された平成元年だったと思います。以来40年の長きに渡り、ご厚情を頂きました。そのうち源さんは平成5年9月に支部長に就任され、17年9月まで12年間支部長を務めあげられました。

平成7年1月に阪神淡路大震災が発生し、交通事情も通信網も悪い中、稲陵会の会員の皆さんの消息、安否の確認に、源さんと一緒に走り回ったことが思い出されます。

源さんは支部長ご在任中に、各卒業学年毎に学年幹事を選任され、一人一人の所まで連絡が行き届くシステムを構築されました。このことが今の関西稲陵会の繁栄に寄与しています。私も源大佑さんから6年間支部長の大役を務めさせて頂きましたが、その間も、源さんには名誉会長として大所高所から助言を賜りました。源大佑さんは4年先輩で横田高校33期卒業です。

源大佑さん。一言で申しますと、『実直な人』を絵で書いたような方でした。曲がった事が嫌いで、常に前向きの人生哲

学を持っておられました。

平成30年9月、開催されました関西稲陵会の創立60周年の総会で、特別講演を60分されました。

自ら、苦勞しながら事業を創業され、成功を収められた体験談や事業観について熱弁を振るわれました。

とにかく、「目標をもって！難しい仕事や、苦難の道にチャレンジせよ！そうすることが、次は必ずチャンスとして、巡ってきて成功の道へと繋がっていくから！」そんな貴重なお話でした。

お逢いするときの話題はいつも、奥出雲町の事、故郷の事、横田高校の事でした。

平成31年11月2日、横田高校の創立百周年の記念行事が開催され、一緒に参列しました。これが、最後の大きな思い出となってしまいました。

その時の言葉が今も耳に残ります。

「百周年記念の行事にしては、少し寂しいね。もっと、もっと地元の卒業生も参加して、賑やかに、横田高校を盛り上げてもらわんと。」

年号も令和に変わりました。世界中が

コロナ禍に見舞われ、世の中も人の行動も一変しました。そんな中で会合を持つことすらできません。でも源大佑さんが尽力され、作り上げられた関西稲陵会の輝かしい歴史は、確実に若い世代に伝わって、引き継がれて来ています。

源さん、ご安心ください。関西稲陵会は益々繁栄が続きます。稲陵会という素晴らしい組織は永遠です。天国から見守っていてください。

関西稲陵会の会員の皆様を代表して、謹んでお悔やみ申し上げ、心からのご冥福をお祈り申し上げます。

安らかに眠りください。



(左から)源大佑氏、西本功氏
「忘れないで奥出雲」を唄った七瀬もみじさん(演歌歌手)
元稲陵会長田部亨氏

加藤延之さん追悼

稲稜会東京支部
東京農工大学名誉教授
瑞宝中綬章

高橋明善

(第32期)

加藤延之さんが2021年5月28日肺癌でなくなりました。彼は文字通り私の竹馬の友でした。1940年小學校に入學以来87歳の今日まで、友情をつちかてきました。

加藤さんは1952年横田高校卒業、東京大学入学、東京新聞を経て中日新聞で新聞記者となりました。ちなみに中日新聞は発行部数300万部を超す読売・朝日に次ぐ日本第三位の大新聞です。編集総局長・取締役をへて、子会社名古屋タイムスの社長となり、最晩年は中日新聞社参与として生涯を終えました。

高校時代はテニス部主将、卒業後は東京稲稜会の会長、仁多郡会の会長として、高校並びに故郷の後輩たちの面倒を長く見続けました。

若い頃よく集まった在京の高校時代のテニス部員は、今や私を除き全員が亡くなりました。彼は、2019年の稲稜会東京支部の会を欠席しました。その際電話で癌の罹病を知らされました。阿佐ヶ

谷の蕎麦屋でおちあい、3〜4時間話しました。これが、彼と会った最後です。最愛の夫人も2月に亡くなったそうです。

*たまゆらの 命はかなし 日のしづく
80年の 友消え去りぬ

加藤さんは中学1年は町外の旧制中学校に行きましたが、それ以外は横田農林学校(私は1年、2年在籍)、新制横田中学(3年生)、新制横田高校、東京大学文学部社会学科と私と机を共にしています。二人は共通経験を持ち、生涯固い友情で結ばれていました。

戦時下の小学校では厳しい軍国主義教育を経験し、戦後は貧しい中でも明るい平和と人間尊重の教育を受けました。

私と加藤さんの中学・高校時代はテニスを抜きには語れません。テニス部を創設し、二人でローラーを引いてコートづくりを精を出したのは懐かしい思い出

です。中学・高校を通じ、横田町開催の陽庭球大会は優勝しましたが、県大会では準決勝惜敗が最高の成績でした。

二人は、担任であり国語国文の教師でありテニス部長である安田昭彦先生(晋叟寺住職)の「開拓者になれ」という言葉に鼓舞されたものです。

東京大学に入学後加藤さんはテニス部に入部し、当時大学一部リーグに所属していた東大チームの前衛として参加したことがあるようです。2年生の時、学内

約80チームによる校内大会が開かれ、私は技能抜群の友人と組んで優勝しました。優勝戦の相手は加藤組でした。加藤さんはその時の悔しさを後々まで語っていました。どうあれ、加藤さんは天下の東京大学の一部リーグへ選手として出場しています。誇るべきことだったと思います。

加藤さんといえば脳裏に浮かぶ原風景から二首

*川土手に 座り友待つ 登校路

道々語る テニスと未来

*うんうんと ローラを引いて

コートづくり

見えざる二人の 記憶のきづな
*老いてなお、アキちゃんと呼びかける
幼き日々 帰るがごとし

加藤延之さん、永遠への旅路が健やかであるよう祈っています。多くの友人知人が見守っています。

*わが母校 斐伊の川上 鳥上の山懐に そびえるいらか

合掌

2021年7月2日



左から2人目が加藤延之氏、右端は勝田奥出雲町長

退任のごあいさつ

横路 仁朗

(第46期)



稲陵会会員の皆様には、ご清祥のことと拝察申し上げます。

さて、私は令和2年度末をもちまして稲陵会副会長を退任させていただくことになりました。未熟な私でございましたが、各支部役員の皆様をはじめ多数の会員の皆様のご指導とご支援により、平成19年度に就任して以来14年の長きに亘り副会長としてつとめさせていただきました。この間に賜りました数々のご厚情に対して心より厚く御礼を申し上げます。

この14年の間には、創立90周年と百周年の記念事業がございました。いずれの場合も稲陵会は実行委員会の一員として事業の推進に当たりました。最も大きな任務は事業のための財源の確保でした。支部役員の皆様の多大なご尽力と会員の皆様の母校に対する熱い思いにより、目標額を大きく上

回るご寄附を寄せられたことに敬意を表しますとともに、稲陵会の底力の大きさを感じた次第です。改めてご協力に深く感謝申し上げます。

また、県内はもとより県外の支部の会合等にも参加させていただきました。初めてお会いする方も親しく声をかけて下さり、横田高校の卒業生という共通項がもたらす絆のすばらしさを実感しました。回を重ねるごとに交流が深まっていくことを、ありがたく思いました。心温かなお付き合いをいただき、誠にありがとうございました。

母校横田高校は、ホッケーをはじめとする部活動や地域に根差した教育など特色ある教育に取り組んでおられます。また、稲陵会においては、近年支部間の交流など会員相互の親睦を深めてきておられます。今コロナ禍で活動が思うに任せませんが、一日も早く終息することを願っております。

末筆ながら、横田高校と稲陵会の益々のご発展をお祈り申し上げます。

6年間を振り返って

植田 美由紀

(第54期)



平成27年から6年間、私は副会長として稲陵会に参加させていただきました。

荷の重い役ではあったのですが、この間に得た出会い、さまざまな会合や行事への参加など、今思えば他では得がたいとても貴重な体験をさせていただきました。また、会長様をはじめ、会員の皆様の母校への思いを間近で知ることができたことも、私にとってはとても有意義なことでした。

副会長としての初めての活動は6年前、会費の値上げについての話し合いでした。少子化に伴う入会金の減少の為、値上げをお願いせざるを得ないこと、また県外の会員の皆様にも協力をいただきたいことなど、会合はとても慎重に繰り返されました。皆様のご協力が確定したときは何かほっとしたことを覚えています。

そして次に体験した大きな活動は、横高創立百周年記念事業でした。さまざまな経過を経ながら、奥出雲町、PTA、稲陵会

の協力で百周年事業は盛大に行われました。記念式当日は、とても懐かしい同窓生と言葉を交わしたり、遠くから参加された先輩の方とお話しさせていただいたり、とても嬉しい一日でした。そして最も感動したことは、式典の際の現役生徒代表のあいさつでした。しっかり前を向き、地域に貢献したいと語る姿はとてもたくましく、頼もしいものでした。

その後、新型コロナウイルスの影響により会合や行事参加が殆どなくなり、生徒たちの貴重な3年間の活動も制限されました。生徒たちが苦しい思いをしていると思うと、早期のコロナ禍の終息を願わずにはいられません。

私の家からは船通山の下に横田高校を望むことができます。そして部活に励む子どもたちの声が聞こえます。この姿、声がいつまでも続くこと、100年もの歴史を持つ母校横田高校がますます発展していくことを願い、これからは一稲陵会員として見守りたいと思います。

会員の皆様、高校の先生方には大変にお世話になりました。本当にありがとうございます。

ごあいさつ

細木 敏幸



(第58期)

稲陵会員の皆様には、日頃より稲陵会、母校・横田高校のために様々な面からご支援を頂き、厚く御礼申し上げます。私は、今年度の稲陵会の役員改選において、副会長の任を承ることとなりました、馬木出身の細木敏幸と申します。色々と皆様にご迷惑をおかけすることもあると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今まで、稲陵会の活動に積極的に関わってきたと必ずしもいえない私にとって、この任を承ることに大変心苦しく思うところがありました。しかし、現在、私は教育魅力化コーディネーターとして横田高校に勤務しており、その立場から高校と稲陵会との橋渡しができればと思っています。そこでこの紙面をお借りして、稲陵会員の皆様に、横田高校の今について卒業生の一人とい

う目線からお伝えすることができればと思います。

ここ数年の横田高校の入学者数は、毎年、70人前後となっています。

そのため、本年度から入学定員が30人×3学級90人となりました。また、入学者のうち、仁多郡内からは50〜60人、郡外や県外などからは概ね10〜20人が入学してきています。県外からは東京や神奈川県、愛知、大阪、広島など様々な地域から入学してきていて、郡内の生徒と郡外や県外の生徒とが互いに交流し合い、刺激を受け合いながら学校生活を送っています。郡内の中学校卒業生数が減少してきている中、今後の横田高校と稲陵会の発展・充実のため、郡内からの入学者にとっても、また、郡外・県外からの入学者にとっても、魅力ある学校である必要を感じています。

コロナ禍のため、稲陵会の県内外の各支部の諸活動もなかなかできない状況ではありますが、母校への思いを大切にしなが、会員相互の絆を深めていきたいと思っています。

就任のごあいさつ

末 森 利江子



(第59期)

この度稲陵会の副会長を拝命致しました第59期卒業生

の末森です。様々な分野で活躍されている先輩諸氏が大勢いらっしゃる中、教育分野の職歴もなく浅学非才であります私が歴史ある稲陵会の大役を引き受けすることとなり、身の引き締まる思いです。

少子高齢化の進展により、横田高校の入学者数も減少し、寂しさや将来への不安を感じているのは私だけでなく会員の皆様も同じだと思います。そのような現状の中、高校から送付していただく学校だより「稲田が丘」などを拝読させていただくと、

ホッケー部をはじめとする様々な部活動での活躍や高校の魅力化事業の展開、地域学習拠点施設を活用した地域住民との交流活動など、横田高校ならではの素晴らしい取り組みや実績に同窓生として誇らしさを感じずにはいられません。また、一昨

度町で行われたタウンミーティングには横田高校生が出席され、自らが考えた町の将来を見据えた施策の提案や、将来も奥出雲町で暮らしたいという頼もしい発言に感動すら覚えました。このように次代を担って

ようと考える後輩の皆様が増えていくことを願うのと同時に、恵まれた学習環境や指導で培った能力を活かした一線での活躍をも期待しています。そのためには稲陵会は何よりの応援団となるでしょう。

しかしながら、現在直面しているコロナ禍で私たちの日常が一変し、対面や移動を避ける生活様式は、人間が本来持っている社会的なつながりに変化をもたらしました。会の目的でもあります親睦や交流など活動ができにくい状況になっており、一日も早い収束を願うばかりです。

令和元年度百周年を迎えた本会ですが、素晴らしい人材を輩出する高校と、同窓の皆様とのつながりを持つようお手伝いができればと思います。微力ではありますが会の発展のため尽力してまいりますので、皆様方からの倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

教育実習を終えて

松川 拓 大 (第98期生)

まずは、新型コロナウイルスが蔓延している中、教育実習を引き受けていただいた校長先生をはじめとする諸先生方に感謝申し上げます。私は、4年前に横田高校を卒業して今回教育実習に参加させて頂きました。実習生が自分一人であったため、初めは不安ばかりでしたが、生徒の皆様が横田高校のよさである大きな声であいさつをしてくれたり、先生方が声をかけて下さったりで、緊張を和らげることが出来ました。授業でも自分が準備したとおりにできるかどうか不安ばかりでしたが、生徒の皆さんが真剣に取り組んでくれたため予定どおり授業を進めることが出来ました。4年前までは生徒という立場で当たり前のように登校し授業を受けていたのに、4年後教壇に立つのが、不思議に感じました。教えるということは、とても難しいことだとあらためて分かりました。生徒にも能力の差があるため、全員に同じ指導をするのではなく、周りを見て、出来ない生徒には、出来るようにする為の段階的な指導が大切だと学ぶことが出来ました。高校生の時に当たり前の様に受けていた授業は、先生方の努力と準備があつたものだと実習を通してわかりました。苦勞した指導案や教材作りでは、先生方に夜遅くまでご指導を頂きました。ありがとうございました。3週間という短い期間でしたが、充実した毎日を過ごすことが出来貴重な経験が出来ました。ありがとうございました。



東京オリンピック

ホッケー日本代表
からのメッセージ

2021年7月23日～8月8日までの17日間、東京都を中心に各地で熱戦が繰り広げられた東京2020オリンピックにホッケー日本代表として出場された横田高校ホッケー部OB・OGの皆さんに、東京オリンピックに出場した感想や皆さんへのメッセージをいただきました。



田中世蓮 (第91期)

男子ホッケー日本代表「サムライジャパン」の田中世蓮です。東京2020オリンピックでは、たくさんの応援ありがとうございました。

コロナウイルスの影響により、オリンピックが1年延期となりました。私自身、コロナ禍の中でのオリンピック開催は不安や葛藤がありました。しかし、スポーツの力を信じて大会に向かいました。私たちサムライジャパンの目標は金メダルでした。結果として予選敗退となり、期待に応えることができませんでした。今後、オリンピックでの経験を後輩たちに伝え、日本ホッケー界に活かしていきたいと思っています。

私がオリンピックに出場することができたのは、奥出雲で過ごした時間がとても貴重であり、皆様からの応援や支えがあったからです。感謝しています。いま奥出雲には、未来の代表選手たちがいます。後輩たちがオリンピックの舞台で活躍することを期待しています。



錦織 えみ (第91期)

東京2020オリンピックの出場に際し、沢山のご声援や激励をありがとうございました。沢山の方のメッセージが入った横断幕や、テレビ、SNSなどを通じて応援していただいたおかげで、私らしく全力で頑張ることができました。皆さんの応援が力になりました。本当にありがとうございました。

私にとって2度目のオリンピックも目標としていたところには届きませんでしたが、5年間、様々なことを乗り越え、金メダルを目標に最後まで全力で戦った「さくらジャパン」を誇りに思います。

8月に開催されたインターハイでの男女ホッケー部の活躍をとても嬉しく思います。母校の頑張りはいつも気にしています。現在もコロナが猛威を振るっており、思うように過ごすことができない状況だと思います。目標を見失いそうになる時もあると思いますが、今努力していることが報われる時が来るはずなので、仲間とともに頑張ってください。これからも活躍を期待していますし、応援しています。



福田 健太郎 (第94期)

オリンピックが東京で開催されることが決まったのは2013年の高校在学中のことでした。その当時は振り返ると、幼少期からの夢でもあったオリンピックが自分の母国で開催されるということで、とにかくオリンピックに出場することを目標に毎日を過ごしていました。夢を追うことにフォーカス出来る素晴らしい環境の中で過ごすことが出来たのは地域の皆様や、「ホッケーの町」奥出雲町のお力添えがあったのだと感じており、この場で御礼申し上げます。

また、当時のスポーツ少年団コーチの方や中学、高校の顧問やコーチの方々のご指導にも改めて感謝いたします。

無観客での開催となりましたが、SNS等での皆様の応援は力になりました。

ありがとうございました。



落合 大将 (第92期)

チームとして目標にしていた結果には到達することができず、申し訳なさや悔しさもありますが、これまでオリンピックに向けて取り組んできた時間は無駄ではなかったと実感できる大会となりました。オリンピックを通して、改めて勝つことの難しさや1点の重み、世界との差を感じるとともに、今の日本のホッケーを示せたのではないかと感じています。今大会は無観客開催となりましたが、SNSを中心としてたくさんの方々から応援して頂き、オリンピックは特別な舞台であると思いました。

このような誰にでもできない貴重な経験ができ、これまで関わって頂いたすべての方々に感謝したいです。

ありがとうございました。



山崎 晃嗣 (第94期)

まずはじめに、オリンピックの舞台に立つまでに多くの支えがありました。私を支えてくれたすべての方に感謝しています。日本代表は金メダル獲得を目指して頑張りましたが結果は予選敗退でした。この結果をしっかり受け止めて次に繋げていきたいと思っています。

私は世界一のホッケー選手になりたくて、その過程として広島県から島根県の横田高校へ進学しました。横田高校では日本一を目指して戦いましたが、高校の時には日本一にはなれませんでした。ですが、その悔しさは大学に行き果たすことができました。横田高校時代にはとにかくホッケーの練習を朝から夜までやりました。毎日ホッケーのことを考えながら生活をし、夢のために努力し続けました。高校の時には叶わなかった夢も、諦めずに前向きに頑張れば叶うんだと自分の人生を通して実感しました。私は小学校の卒業文集にオリンピックに出場したいと書きました。その夢は叶いました。しかし、まだまだ私には夢があるのでその夢に向かって一步一步歩んでいきたいと思っています。きっと、みなさんにはこの経験を伝えることができると思います。皆さんに私のプレーや言葉で勇気や希望、感動を与えることが出来たとしたら私はホッケー選手をやっている価値があると思います。

ホッケー日本代表、山崎晃嗣の応援ありがとうございました。横田高校で過ごした3年間は私にとっては宝物です。ありがとうございました。



膳棚 大剛 (第91期)

今回小さい頃からの夢であったオリンピックという大舞台に挑みました。結果は1分4敗と悔しい結果に終わりました。大舞台での試合はとても楽しかったです。高校生活はとにかくホッケーが好きで、朝練から始まり、授業が終わって夜までホッケーをしていた思い出があります。横田高校でホッケーを当たり前のように毎日練習できる環境があり、オリンピックに出るという夢に向かってホッケーを続けられたと思います。そこにはたくさんの支えがあり、いろいろな皆様のご指導やご声援でオリンピックの舞台でプレーすることができました。ありがとうございました。

令和2年度 稲陵会別途積立会計決算書

1. 収入の部

項目	予算額 (A)	決算額 (B)	増 減 (B) - (A)	備 考
繰 越 金	2,460,602	2,460,602	0	
繰 入 金	50,000	50,000	0	経常費会計から繰入
雑 収 入	398	75	△323	預金利息
合 計	2,511,000	2,510,677	△323	

収入済額 2,510,677円(次年度に繰立)

収入済額の内 709,803円は定期預金、1,800,874円は普通預金

令和2年度 稲陵会名簿会計決算書

1. 収入の部

項目	予算額 (A)	決算額 (B)	比較増減 (B) - (A)	備 考
繰 越 金	616,469	616,469	0	
繰 入 金	50,000	50,000	0	経常費会計から繰入
雑 収 入	531	6	△525	預金利息
合 計	667,000	666,475	△525	

2. 支出の部

項目	予算額 (A)	決算額 (B)	比較増減 (B) - (A)	備 考
稲 陵 会 員 名 簿 作 成 費	30,000	16,720	△13,280	名簿データ更新経費
予 備 費	20,000	0	△20,000	
合 計	50,000	16,720	△33,280	

収入済額 666,475円－支出済額 16,720円＝差引残額 649,755円(次年度に繰越)

令和2年度 稲陵会経常費会計決算書

1. 収入の部

項目	予算額 (A)	決算額 (B)	比較増減 (B) - (A)	摘 要
繰 越 金	1,567,771	1,567,771	0	
会 費	1,006,500	1,015,000	8,500	@500×2,030名分
入 会 金	1,022,400		△53,440	1,2年生 @400×延1,594名分 3年生 @480×延682名分 過年度 @400×延10名分
協 力 金	10,000	15,759	5,759	14名分
雑 収 入	329	449,866	449,537	百周年記念事業寄付活動交付金、預金利息 他
合 計	3,607,000	3,048,396	410,356	

2. 支出の部

項目	予算額 (A)	決算額 (B)	比較増減 (B) - (A)	摘 要
会 議 費	30,000	3,600	△26,400	評議員会 他
活 動 費	880,000	40,000	△840,000	支部総会助成金
通 信 費	480,000	469,614	△10,386	会報発送(3,376通)、会報発送用封筒 他
記 念 品	280,000	255,300	△24,700	卒業記念品(ロディアメモカパー ブロックメモ付)
慶 弔 費	50,000	0	△50,000	
印 刷 費	260,000	354,466	94,466	稲陵会報印刷(7,600部) 他
名 簿 会 計	50,000	50,000	0	
学校後援会	100,000	100,000	0	学校後援会負担金
別途積立会計	50,000	50,000	0	
稲陵会館維持費	150,000	150,000	0	
事 務 経 費	300,000	300,000	0	事務委託料
雑 費	100,000	481,730	381,730	百周年記念事業寄付活動交付金、ホッケー日本リーグ協賛広告料 他
予 備 費	877,000	0	△877,000	
合 計	3,607,000	2,254,710	△1,352,290	

収入済額4,017,356円－支出済額2,254,710円＝差引残額1,762,646円(次年度に繰越)

令和2年度稲陵会経常費会計 他決算監査調査書

島根県立横田高等学校稲陵会会則第7条に基づき、稲陵会経常費会計、稲陵会別途積立会計、稲陵会名簿会計の決算書及び出納簿、証憑書類等一切について監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

校内監査
監 事 三谷 今日子
監 事 小田川七恵
監 事 松本 健光
令和3年5月20日

稲陵会監査
監 事 内 田 功
監 事 白根 裕文
令和3年6月24日

《東京》 支部長 三澤 啓二 (45期)	《関東》 支部長 藤木 真 (60期)	《広島・山口》 支部長 長谷川 健 (62期)	《松江》 支部長 田中 裕一 (54期)	《横田》 支部長 板垣 明 (71期)	《鳥上》 支部長 浅野 保夫 (48期)	《八川》 支部長 松崎 浩之 (41期)	《馬木》 支部長 杉部 久由 (53期)	《三成》 支部長 糸原 弘 (71期)	《阿井》 支部長 小谷 貴宣 (53期)	《亀嵩》 支部長 米田 嘉一 (76期)	支務局長 佐藤 安則 (67期)
----------------------------	---------------------------	-------------------------------	----------------------------	---------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------

県内・県外支部一覧

会 長 石原 肇 (42期)	副 会 長 安部 隆幸 (47期)	副 会 長 細末 敏子 (58期)	副 会 長 深田 新 (58期)	監 事 内田 功 (58期)	監 事 白根 裕文 (59期)
-------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-------------------	--------------------

令和3年度 役員

- 令和2年度会務・事業報告
- 令和2年度会計決算、監査報告
- 役員改選
- 令和3年度会務・事業計画(案)
- 令和3年度会計予算(案)
- 稲陵会諸会計の会計事務の委任
- その他

稲陵会評議員会
*今年度は各支部代表者にご出席いただき、開催しました。
(R3・6・28)

第56号となる稲陵会報を今年度も上梓することが出来ました。お忙しい中にもかかわらず原稿をお寄せ下さった皆様、厚くお礼申し上げます。有り難うございました。

永年に渡り、本会の運営、発展にご尽力いただいた加藤様、源様のご逝去により、大きな支えを失った悲しみと喪失感を覚えました。同時に二人の遺志を継いでいくことが残された者の使命であると強く感じました。

また、本会の発展に多大なる貢献をされた横田副会長、植田副会長のご勇退も我々に寂しさと不安を与えましたが、細木副会長、末森副会長のご就任により心強く新たなスタートを切ることができました。

長引くコロナ禍の影響で今年度も各支部総会の開催は難しい状況でした。一日でも早く会員皆で集い、同じ学び舎で過ごした日々の思い出が語られる日の来ることを切に願います。

編集後記

植田 祐行 (61期)	恩田 賢二 (81期)
田中 智美 (63期)	伊藤 直登 (86期)
内田 由紀 (63期)	千夏 (93期)
小田川七恵 (76期)	平井 千夏 (93期)

校内事務局(幹事)

《布勢》 支部長 渡部 雅男 (54期)	《三沢》 支部長 山根 健二 (50期)	《比田》 支部長 糸原 正良 (39期)	《雲南》 支部長 景山 良教 (46期)	《日南》 支部長 石井 隆夫 (45期)	支務局長 丸山 善彦 (43期)	支務局長 福田 貢悟 (58期)
----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------	---------------------

※布勢支部事務局の藤原久一様(43期)が退任されました。長らく本会の運営と発展に貢献いただきましたことに、心よりお礼申し上げます。